社会科学習指導案

千葉市立おゆみ野南中学校
日　時　平成 28 年 6 月 21 日(火)
展開学級　２　　年　　Ｂ　組
展開場所　２　年　Ｂ　組　教　室
授業者　　松　井　　那　晃

１　単元名

近世の日本　３節　産業の発達と幕府政治の動き

享保の改革と社会の変化～貨幣経済の広がり～

２　単元について

江戸時代前半は、大名統制・鎖国体制・身分制度により、徳川家康・秀忠・家光が諸大名を統制し、約２６０年間も続く江戸幕府の基盤づくりを成し遂げた時代だと言える。戦が世の中からなくなり、平和な時代とも象徴される江戸時代のはじまりである。この時代の中で、幕府や諸藩の政策も影響し、農業や諸産業も飛躍的に成長することとなる。農業では、新田開発が奨励され、豊臣秀吉の頃の２倍の耕地面積となり、それにともない、備中鍬や千歯こきなどの農具の技術も発展していった。当然、このような農業技術の発達は農業生産量の増大へと繋がる。米の生産量は豊臣政権の二倍以上となり、人口も増大していった。また米の余過剰は、農民の生活に少なからず余裕を与え、米を売る者や、都市部で需要が高い麻や綿、油菜などの商品作物を栽培する者が増えていったのである。そのため、商品作物の流入により都市部では商工業が発達していく。三都（江戸・大阪・京都）を中心に、呉服屋や外食産業などが発達し、経済力を持った町人を担い手とする華やかな民衆の元禄文化が形成されていくのである。これら江戸時代前期の農業と諸産業の間には、需要と供給の関係がすぐに築かれ、貨幣経済が都市だけでなく、農村まで浸透していったことは容易に想像できる。

そして江戸時代中期になると、幕府による政治改革が求められる時代となる。新田開発を尽くし、米の生産高の限界が生じた上に、貨幣経済が深く浸透したこの時期、人口が増加せず米の需要が一定となってしまったのである。米が豊作となれば米価は値下がり、米で支払われる武士階級の実質的な収入は減少することとなったため、武士の生活は困窮を極めた。そのため、諸藩や幕府は早急にこの財政難を解決しなければいけなくなったのである。しかし３度の政治改革（享保の改革、寛政の改革、天保の改革）において、政権担当者（徳川吉宗、松平定信、水野忠邦）は農業を重視した年貢の収入増を目指したのである。既に貨幣経済が農村まで浸透したこの時期に、重農政策は適当とは言いがたい状況に合った。なぜなら、物々交換のしくみから離れた農村では、土地を持つ人（地主）と土地がない人（水呑百姓）に分かれていただけでなく、土地をあえて持つ必要もない百姓も出現したからである。例えば、江戸初期にいた柴草屋という廻船商人は、大船を二・三艘持ち、日本の廻船交易に深く関わっていたが、その実態は前田家領内の石高を持たない水呑

百姓であった。柴草屋のような非常に豊かな経済力をもった人物は、土地など持つ必要がないのである。つまり、土地がない人（水呑百姓）が全て土地を持てない貧民ではなく、あえて土地を持つ必要のない百姓を生み出したところが貨幣経済の浸透による農村の大きな変化の一つであると言えよう。こうした変化のなか、農村の中では土地を持った大農が減少し、土地が少ない小農や土地を持たない水呑百姓が増加していく。この変化は単に貧富の格差が広がっていったからだけではなく、農村の中でも貨幣に依存した兼業農家が増えていったからではないだろうか。田畑を持っていれば年貢がかかるのでは、田畑を捨て出稼ぎや、職人になる農民がいたって何ら不思議ではない。また貨幣で米を買い、その米を年貢として納める小農もいたのではないだろうか。

そうした農村の変化に抑制をかけたのが、『田畑永代売買禁止令』や『田畑勝手作禁止令』『農地帰農令』などの政策である。これらの政策が諸々、困窮する武士のためではあるが、前述したように農村の変化の実態にまったく合っていなかった。そのため幕府による重農主義の政治は、農村の小農や水呑百姓に耕作を強要し、貧富の差を加速させる結果となったのである。

また百姓一揆の件数から１８世紀頃の江戸時代を考察しても、貨幣経済の浸透による社会の歪みが農村に影響を与えていることがわかる。百姓一揆の背景は、年貢への重税や定免法・検見法といった取り立て方に不満をもって起きた一揆だけでなく、領主の不正や自分たちの尊厳を守るための一揆など、その背景は多様にある。その中でも、江戸の三大飢饉（享保・天明・天保）が百姓一揆の発展の大きな要因であった。しかし、飢饉の被害を強く受けた農村では、稲作以上に利益となる商品作物の栽培の優先をしていたが故に、凶作を免れず飢えと貧しさの極限状態に陥る村もあった。その一方で、都市では有力な商人による米の買い占めが行われ、最下層の町人たちによる打ちこわしが多発したのである。このような社会の動揺に対し、幕府がとった政策といえば、えた・非人を利用した差別意識の強化くらいであった。

そのため、江戸幕府の信用は失われていき、民衆は新しい学問・思想を着目するようになる。国学や蘭学が広まり、また文化の担い手が京都などの上方の町人から江戸の町人へと移り、江戸政権を皮肉るような逞しい化政文化が誕生した。また諸藩では、財政難をどう乗り切るかを独自の財政政策が行い、反射炉の製造や、黒砂糖の専売制などで成功した雄藩（薩摩・長州・土佐）などが出現した。

このことから、江戸時代において貨幣経済が社会に浸透していくことは、農業や諸産業に変化を与えただけでなく、江戸幕府前半に築かれた大名統制・鎖国体制・身分制度の統制による絶対的封建制度そのものをゆるがす原因となったと考える。

従って本時では、貨幣経済の広がりによる影響を、武士・百姓・町人の生活の変化から、江戸幕府の支配体制が揺らいでいく一面を捉えさせることを狙いとした。また学習指導要領（４）近世の日本・エの内容の取り扱いにおいて、幕府の政治改革については「百姓一揆などに結び付く農村の変化や商業の発達への対応という観点から、代表的な事例を取り上げるようにすること。」とある。そのため『百姓一揆の発生件数』『天明飢饉之図』『問屋制家内工業』『工場制手工業』『打ちこわし』を農村の変化・諸産業の発達の代表的な事例とし、貨幣経済に翻弄された幕府の政治改革を考える重要な要素とすることで、明治以降に税制度が貨幣となったことへの理解を深めることにつなげたい。

3　研究との関わり

本校は『「豊かな心」を育成する指導のあり方～「学び合い」の場を通して～』を研究主題とした。それを受けて社会科部会では『「豊かな心」を育成する社会科指導のあり方～互いの考えを通して～』を研究目標とした。

「豊かな心」とは、生命を大切にする心や他人を思いやる心、規範意識、公共心の高さなどの側面がある。「公民的資質の基礎」を養うことを目指す社会科にあっては、平時の学習指導がそのまま「豊かな心」の育成に直結する部分が多い。本校の研究主題に鑑み、具体的には①生徒が自分の考え表現する活動を行う授業展開を多く設定する。②他者の意見をしっかりと聞き、その意見を尊重する姿勢を育てる。③すべての授業において「わかる授業」の展開を目指す。④社会科における「豊かな心」のはかり方を追究する。この４つを実践していくことで、「豊かな心」を育てたい。

そのために、本時の展開では、武士・百姓・町人の生活の変化を複数の資料を読み取らせ、互いの考えを積極的に交換する場面を作りたい。また、班ごとの意見を集約し、個人で考察させることで、貨幣経済の広まりによる社会の変化を多面的・多角的に捉えることができればと考える。

4　単元の指導計画及び評価計画

時間	項目	評価規準
1	農業の発達や 諸産業の発達	○江戸時代の産業の様子について関心を高め、意欲的に調べている。（関心・意欲・態度） ○産業、交通の発達によって貨幣経済が進展し、財力をつけた町人の力が増していったことを理解し、その知識を身に付けている。（知識・理解）
1 (本時)	享保の改革と社会の変化 ～貨幣経済の広がり～	○貨幣経済の広がりによる武士・百姓・町人の生活の変化について関心を高め、意欲的に学習している。（興味・関心・意欲） ○資料から読みとった情報を活用し、改革について考察することができる。（思考・判断・表現）
1	享保の改革と社会の変化 ～幕府の政治改革～	○幕府の政治改革の内容を資料から読み取り、まとめている。（技能） ○幕府の政治改革の内容とその影響を、幕府・諸藩・農民の立場から多面的に捉え、考察している。（思考・判断・表現）
1	田沼の政治と寛政の改革	○田沼の政治と松平定信の政治を比較し、政治改革の目的について考察し、説明している。（思考・判断・表現） ○「北方探検」をもとに、蝦夷や樺太の探検が行われたことを知り、幕府の対外関係のあり方を理解している。（知識・理解）

1	元禄文化と化政文化	○文学作品の「見返り美人図」などから元禄文化の特色を読みとっている。（技能） ○国学と蘭学の発達や化政文化の特色に付いて調べ、新しい学問や文化生まれた背景を、元禄文化と比較しながら考察し、説明している。（思考・判断・表現）
1	外国船の出現と 天保の改革	○外国船の接近とそれに対する幕府の対応について年表にまとめ、幕府に新たな課題が生じたことを理解し、その知識を身に付けている。（知識・理解） ○大塩平八郎が乱を起こした理由や天保の改革の内容を調べ、幕府政治が行き詰まっていったことについて考え、その過程や結果を説明している。（思考・判断・表現）

5　本時について

（1）本時の題材　　享保の改革と社会の変化～貨幣経済の広がり～

（2）本時の目標

○貨幣経済の広がりによる武士･百姓･町人の生活の変化について関心を高め､意欲的に学習している。（興味・関心・意欲）

○資料から読みとった情報を活用し、改革について考察することができる。（思考・判断・表現）

（3）本時の内容

時配	学習内容	教師の支援（◎）及び評価（◇）
導入 （3分）	○前時の授業を振り返り、農業の発達の状況を把握する。	◎プレゼンテーションソフトを活用し、農業の発達の状況を示す。
	貨幣経済が広がることで、社会はどのようになっただろう？	
展開 (37分)	○班ごとに武士・百姓・町人の資料を配布し、資料から読みとれる情報をたくさん挙げる。 ①下級武士の実態・武士の財布 →武士の生活は苦しい。 米を給料にしていたため、貧しい。 武士にお金を貸す商人がいた。 武士は米を換金する必要があった。 ②農村の変化、農民の家計簿 →貧富の格差が広がった。 貧しい百姓は土地を売った。 豊かな百姓は土地を増やし、より豊かになった。	◎情報の思いつくことを素直に出していくよう助言する。 ◎たくさん情報を引き出した後、貨幣経済の広がりに関係することがらに絞るよう助言する。 ◎難航しているグループには、適宜助言する。 ◇関心を高め、意欲的に学習している。

	③町人の様子、商店街 →無町時代に比べ発展した。 さまざまな産業が誕生した。 失業者がいないほど、都市には多くの産業があった。 〇それぞれ資料から読みとった情報を、ホワイトボードシートにまとめ、黒板に掲示する。 〇武士・百姓・町人について分かったことを、発表する。 （武士・町人・百姓についてそれぞれ１班ずつ発表する） 〇天明飢饉之図、百姓一揆の発生件数、問屋制家内工業、工場制手工業の資料から、百姓の生活についてさらに知識を深める。 〇打ちこわしの資料から、町人の実態についてさらに知識を深める。	◎発表の際は、聞く姿勢、話す姿勢を意識させ、呼びかける。 ◎配布した資料をテレビに映し、各班から得た情報を、それぞれ共有する。 ◎プレゼンテーションソフトで、資料を全体に映す。 ◎貨幣経済の広まりによって、社会に大きな変化あったことを掴ませる。
まとめ (10 分)	〇貨幣経済の広がりによって、大きな混乱が生まれたことを理解した上で、どのような改革が必要かを考える。 〇自分の考えを、発表する。	◎根拠を意識して記入できるよう呼びかける。 ◇資料から読みとったことを活用し、考察することができる。

（４）評価

〇貨幣経済の広がりによる武士･百姓･町人の生活の変化について関心を高め､意欲的に学習できたか。（興味・関心・意欲）

〇資料から読みとった情報を活用し、改革について考察することができたか。（思考・判断・表現）